

【ポスター発表】

里親への支援に関する考察

— 全国の里親調査データを用いた量的側面から —

○ 東京都健康長寿医療センター研究所 深谷 太郎 (4668)

キーワード：里親、支援、量的研究

1. 研究目的

子どもの社会的養護は、大きく分けると施設と里親に分けることができる。日本の場合、施設での養護に偏重しており、要保護児童に占める里親委託児童の割合は12%と、他の国が43~93%¹⁾という状況と比べると著しく低い。厚生労働省の福祉行政報告によれば、委託里親数についてはこの5年ほどは増加しているものの、登録里親数は減少傾向に有り、里親委託児童の割合を急激に増加させるには難しい状況である。

登録里親数が増えないのは様々な理由があると思われ、それについての研究は多数存在する。また、里親の元で生活している子どもや、里親出身者の実態についても、多数の報告がなされている。しかし、里親となっている「親」に対しての全国規模の量的調査はまだ数が少ない。

そこで、本研究では、昨年度実施された調査データを用いることで、里親への支援の状況をマクロな視点から考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

1) 分析対象：本研究は、昨年度行われた郵送調査データに対して、二次分析を試みた結果を報告する。郵送調査は、2012年6月に、全国66箇所の里親会に調査票を郵送し、養育里親への配布を依頼した。養育里親には郵送での返却を依頼した。2,236票配布し、回収は1,209票、回収率は54.1%であった。

2) 分析項目：周囲からのサポートは、「これまで里子の扱いに手を焼いたとき、誰の助言や励ましが役に立ったか」を、配偶者、親、配偶者の親、実施、身内、近所の人、友人、里親仲間、児相の担当、という9つの領域に分け、「とても役に立った」「わりと」「あまり」「ほとんど」「相談せず」の5択で回答を得た。養育の返上意思については、「何度も考えた」「返上したい気持ちになったことがある」「返上したいという気持ちはほとんどなかった」「全くなかった」の4択で尋ねた。現在の里子以外に新しい里子を預かりたいかは、「ぜひ預かりたい」「場合によっては預かりたい」「あまり預かりたくない」「預かりたくない」の4択で尋ねた。

里子の性格については、「わがまま」「落ち着きが無い」「甘えたがる」「すぐ泣く」「人の顔色を見る」「人に心を閉ざす」「一人より集団でいるのが好き」「素直でない」「感情の起伏が激しい」「すぐに暴力をふるう」「パニックを起こす」「言葉が乱暴」「よく嘘をつく」

「よく約束を破る」「反省心がない」「物やお金を取る」を「とても」から「違う」までの5択で尋ねた。

3. 倫理的配慮

本研究を行うに当たり、元データ権利者の承諾を得ている。その際利用した電子データには、対象者氏名、対象者の生日、居住町名等の個人情報に含まれておらず、調査対象者の個人情報が漏れる可能性はない。また、元データにおいては、東京成徳大学の倫理委員会で承認がされ、質問において倫理上問題のある項目がないことが確認されている。

4. 研究結果

因子分析の結果、『里子が来て数ヶ月時点での性格』は3つの因子が抽出された。これらを便宜上「第一因子：問題行動因子（例：暴力など）」「第二因子：問題態度因子（例：嘘をつくなど）」「第三因子：凝集性因子（例：過度にべたべた）」と命名する。

養育の返上意思を従属変数とした回帰分析を行った。独立変数として、初めて里子に来たときの里子の年齢、里子の性別、里子の性格（上記を因子分析）、手を焼いたときに役立った助言・励まし（9領域）を投入した。その結果、1.初めて里子を受け入れた際の里子の年齢が高い 2.里子が男の子 3.上記の3因子の得点が高い といった場合、養育の返上を志しやすいことがわかった。支援による緩衝効果を調べたが、9つの次元のいずれも、緩衝効果が無く、サポートで養育権の返上は止められないことが明らかとなった。また、「あらたな里子を預かりたいか」についてもそれを従属変数とした回帰分析を行った。独立変数は上記のものを投入した。その結果、里親年齢および里子年齢が高いと預かりたくなることが判明し、性格や性別とは関係がなかった。サポートは仲間からのサポートのみが有意であった。

5. 考察

養育の返上についても、新たな里子についても、ほとんどのサポート項目は有意で無かった。高齢者や障害者の介護などの分野においては、サポートがストレスや燃え尽きに対しての緩衝効果があることがいくつかの研究で示されている。本報告ではサポートが有意な効果を示さなかったが理由としては1.現在里親を行っている人に限定した調査であるため、データ自体に偏りがある 2. サポートは「返上の意思を持たない」ことには効果がないが、「意思を持っても実行に移さない」ことに効果がある 3.データに、何人目の里子か、等の重要な情報を尋ねておらず、その影響を捨象できないために表面的に効果がないように見える 等ということが考えられ、今後さらなる研究が必要であると考えられる。

1) 主任研究者 開原久代（東京成徳大学子ども学部）（平成23年度厚生労働科学研究「社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ（被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究）」）

[本研究で用いた調査データは、平成24年度厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業「社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ」（研究代表者 開原久代）の助成により実施した。]